
提督立志伝番外三章～霧雨編～

ふじぼん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

提督立志伝番外三章〈霧雨編〉

【Nコード】

N3524R

【作者名】

ふじばん

【あらすじ】

提督立志伝序章にちよこつとでてきたナオトⅡヒイラギ視点の話。禍刀と呼ばれる刀、霧雨を持つナオト。

魂喰いの刀として恐れられる刀を守りたい人を護るためやむ得ず抜いたナオトは次第に狂化していく。

それでもそれに必死であがない、護りたい人を守るため戦う話。

※主人公、無双なうえ、提督立志伝公開作品一流血表現があります。苦手な方はご注意ください。

第三章第1話 霧雨という禍刀

霧雨。

祖先が倭の国から持ってきた、我が家の家宝の刀にして、決して抜いてはいけないと伝承されてきた刀。

抜けば、その場の軍勢はほふれるもののその後抜きし者に災厄をもたらすと伝承されていた。

その禁を破った親父は今亡く、その禁を破った親父の親友にして義父も息絶え絶えで目が虚ろ。

呪われた刀、霧雨。

全てを断つ邪刀は、持ち主の未来をも断つものなのだと、幼心に思ったものだった。

父も義父も抜きたくて抜いたわけではない。

抜かなければ主君を、そして家族を守れなかったから抜いた。

「父上!!」

「……ナオト」

義父の目の色はもはやからっぽで、俺が視認できているかわからない。そこまでボロボロになると分かっていての決断。

確かに義父の活躍でこの戦いは敵に甚大な被害を与えた。

だけど、結局……。

「儂は、家族を、お前らを守りたかったのに、もうなにも出来ないらしい……」

「そんなことはない、父上は頑張った！だから……」

「ナオト……、ナオト……、お前に、頼みがある」

頼み？

わかつてる。
わかつてるよ！！

「カエデを、お前の妹を、守ってくれ……。儂は敗軍の将。敗軍の将の家族を奴らが見逃すとは思えない……。だから、だから……」

義父は、そつと俺に呪われた刀、霧雨を渡す。

俺は一瞬躊躇するも、俺の家族をこの義父に代わり守っていくため俺もあえて父やこの義父の様に禁を破ろう。

義父は引き取り手のいなかった俺をここまで実の父の様に接し、時に厳しく、時に優しく育ててくれたこの二番目の父の願い。

願いを叶えるために躊躇は無い！！

「絶対に守る。母上も、カエデも!!」

「……、スマン、スマン。お前にまでこの業を背負わせてしまつてすまん。まだ未来あるお前にこの様な業を押し付けてすまぬ……」

我が義父はそう呟いて、静かに目を閉じていった。

[illegible]

シューサク||オオクボ。

俺の義父は邪刀、霧雨によってその生涯を閉じたのだった。

「いたぞ！ あの餓鬼が持ってやがる！」

「迂闊に近づくな！ あの刀は近づくものをすべて分断する！！！」

俺と義父を囲むように、敵兵が囲んでいた。

今、変な単語が聞こえた。

持ってやがる？

こいつらの狙いはまさかこの邪刀？

この侍の国を滅ぼすのが目的ではなく、この霧雨が目的だということか？

俺の思考は囲まれて焦っていた頭の中が徐々に底冷えしていく。

こんなくだらない刀の為に貴様らはわざわざ俺らの家族を不幸に陥れたのか？

俺は気がつくやうと霧雨を抜いていた。

「ぬ、抜いた！！ あの餓鬼、あの刀を抜いた！！！」

「畜生、増援はまだか！？」

貴様らさえ来なければ、俺は、義父は、実父は先祖代々の禁を破らなかつた。

俺たちの平穏を侵害した罪、万死に値する！！

「ぐぎゃあああああああああ！！！」

「ぐへ！？」

「ぶぎゃああ!？」

「ひ、ひいいいい!!」

「お、鬼だ!! 鬼が出た!!」

絶対に許さない。

貴様らには平等に死を。

こんなたわけた戦争を仕掛けてきた奴らに、それに荷担したものは平等に死を!!

父と義父を奪ったこいつらには生きる資格など無い。

ただ斬る斬る斬る斬る!!

気がつくと、一面血の海に化していた。

俺は呆然とその赤い世界を他人事のように見ていた。

俺が、やったのか?

俺がこの血の海を作ったのか?

これが、霧雨?

いくら俺が白兵戦最強種と謳われる侍といえど、こんなこと俺個人の技能では無理。

これが霧雨の与えるチカラで、俺は……。

「ぐ!! ううう!!」

強烈に心臓を締め付けられるような感覚。

ちよつとでも気を抜くと心臓を潰されてしまいそうな圧迫感。

これが霧雨を使った代償……。

霧雨の使用者は魂を削られるというが、これが削られていくということなのか？

使ってみて、祖先がなぜ禁を発したのか、身をもって体感する。

「う、うううう……」

こうしている場合じゃない。

ここは一掃してもまだ町には母上とカエデがいて、敵兵が溢れ返っている。

早く、町に行かないと……。

義父が俺に託した義父の家族、俺が守らないと……。

「母上、ご無事ですか？」

「ナオト？ ああ、よく無事で……」

義母は俺の姿を見て安堵を浮かべること一瞬、その後俺の腰にある霧雨を見て言葉を失ったようだった。

「ナオト、そ、それは……」

「父上は最後まで侍らしく勇敢でございました。父上を守れなく申し訳ございません」

「そんなことじゃありません。あなた、その腰のものは……、霧

雨ですね？」

「はい」

「抜いて、いませんよね？」

「……………戦場より突破するため、3度、抜きました」

「なんてこと…………」

義母の顔が蒼白になる。

「母上、無念ですがこの戦、我々の負けです。敵兵が来る前に国外に逃げましょう」

「ナオト。あなたの気持ちは嬉しく思います。ですが私は家老シューサクⅡオオクボの妻です。たくさんの臣下を置いて私だけ逃げるわけにはいきません…………」

「しかし、俺は！俺は父上、シューサクⅡオオクボに家族の無事を託されました！！」

「ごめんなさい、ナオト。私は行けません…………」

義母は涙を流しながら言った。

「でも、あなたの妹、カエデはあなたに託します。カエデだけは助けてください。それが私の願いです」

「いやだ、俺は母上もカエデも助けたいんです！！カエデだって

母上が必要なんです！　お願いですから、逃げてください！！」

俺はこの二人を逃がすために霧雨を抜いたのに！！

この二人だけでも助けたいから霧雨を抜いたのに！！

「あなたは優しい子。　あなたの母であったことを私は誇りに思います。　ありがとう、私たちの養子になってくれて……」

外の喧騒が騒がしくなる。

斬り漏らした敵兵がだんだんこの屋敷に集まってくる音。

「母上！！」

「時間がありません、カエデを頼みましたよ、ナオト」

俺には、この母を動かせる言葉は思い付けない。

早くしないと確かに例え霧雨があったとしてもこの絶望的袋小路を突破可能なのは時間の問題だった。

「母上、カエデを安全な場所に連れていったら迎えに来ます。　ですので、ご武運を……」

「はい。　カヘイ、ナオトとカエデを頼みましたよ」

義母の横に控えていた義父直近の配下、カヘイは無言で頷き、泣きじゃくるカエデを背負った。

「若。　姫様は私が守ります」

「ああ、頼む」

道中、幾度と霧雨を抜き、反動をカエデに悟られないように進む。
だが、限界がやってきた。

「あ、兄上」

俺の表情がかなり苦しそうなのだろう。

カエデは涙を浮かべている。

できるだけ隠しておきたがったが、今日だけでもう8度、霧雨を抜いた。

意識は朦朧としており、取り繕う余裕は最早皆無だった。

「カヘイ……」

「は」

「この包囲の原因はおそらく俺の持つ霧雨だ。 奴らの狙いは恐らくこの霧雨が狙いなんだろう」

斬っても斬っても尽きない追っ手。

いくら俺らが家老の一族とはいえこのひつこさは尋常ではない。

元々そうではないかと思っていたが、最早それは確信に変わる。

記憶にあるだけで今日切り捨てた敵兵は千を越す。

敵にそれだけ尋常ではない被害を与えておきながら止まぬ追っ手の目的は最早俺の命ではなく、この霧雨が原因なのだろう。

「だから俺が囧になるから、カエデを頼む」

「承服しかねます、若。拙者は奥方様よりカエデ様とナオト様を託されております」

「俺はもういい。どうせこの霧雨を抜いた時点で俺は散ることを覚悟している。どうせ散るなら大事なもん守って散りたい」

俺は涙を浮かべるカエデをそっと抱いた。

「ゴメンな。兄上は最後までカエデを守れそうにないんだ」

「いやです、兄上。一緒に、一緒にいてください」

「絶対にカエデは守るからな」

「いやです、いやです。兄上死んじやいやだ!!」

「死ぬもんか」

「本当？」

「俺がカエデとの約束、破ったことあったか？」

「いっぱいあります」

「ははは、違うない。でもこの約束は守るよ。俺は死なない。そしてカエデを迎えにいく。それまでカヘイの言うことちゃんと聞くんだぞ？」

「……………わかりました。絶対迎えに来てくださいよ?」

「約束は守るよ。 守るさ」

俺はカヘイに頭を下げる。

「カヘイ、カエデを頼む」

「若。 姫様に誓った約束は絶対守ってください。 それが侍ですぞ」

「ああ、わかってる。 簡単には死なないさ」

俺は霧雨を抜く。

「負けるものか、霧雨ごときに……」

第三章第1話 霧雨という桐刀（後書き）

ちよつと外2章行き詰まったので逃避で書いてみました。
元々書く予定のなかったやつですがね。

外2章進行には特に影響はないので外2章と同時進行します。

第三章第2話 劍帝

「ナオト、起きろ」

仮眠していた俺を呼び覚ます声。

「疲れているのは分かるが、もうすぐ軍議の時間だ」

「う、ううう……」

ぼんやりと目を開ける。

そこにはトシヤさんがいた。

「すみません、トシヤさん、ついこっくりいっちゃってました」

目の前に立つ色黒で筋肉質な倭人の男は、ユハリーン海賊艦隊の7番艦隊提督を任されている男だった。

「だいぶうなされていたようだが？」

「……昔の夢を見てしまいました」

「昔？ ……ああ、その刀を始めて抜いた時のやつか」

「ええ」

「ふむ、そんな悪夢を見たんじゃないんじやないのか？」

俺は苦笑しながら無言で頷いた。

「まあ、そんな刀を使っている以上、疲労は仕方がないがな。だが、次の作戦の正否で長かった俺らの戦いは終わる。あと一息、踏ん張ってくれ」

「まあ、俺は傭兵ですからクライアントの依頼は喜んで引き受けますよ。　いよいよ王都包囲ですか」

ちよつと長くなるが簡単に状況の説明をしよう。

ユハリーン海賊艦隊。

名の通り、海賊である。

元は暴政を敷くユハリーン王朝に対し不満を抱くものがユハリーン王朝の船に対して攻撃したのが始まり。

やがてユハリーン王朝に不満を持つ海賊が集まって連合したのが海賊艦隊になり、やがては打倒ユハリーン王朝の勢力にまで膨れ上がっていった。

圧倒的な海軍力で次々と王朝の砦や基地、港を制圧しユハリーン王朝の半数を制圧して今に至る。

で、俺は傭兵としてトシヤさんに雇われこの海賊艦隊に身を置いていた。

色々省略して思ったより長くなかったが、そこら辺は愛嬌として勘弁してほしい。

俺はあくまで傭兵であり、主義主張は持たず金を稼ぐ手段としてただこの軍に在籍しているだけだ。

この海賊艦隊をまとめるバーンって男の人望ならば国を盗った後もなんとか回していくことも出来るだろう。

「ん、軍議？」

「ああ、参謀殿がお前も出席するようにとのことだ」

「なんで俺が？ 俺は一介の傭兵にすぎないんですが」

「さてな。とにかく参謀殿がお前に会いたがっているんだよ」

艦隊参謀。

確かクリスとかいったか。

バーンの懐刀と名高い男が俺に何の用だろう。

「まあ、わかりました」

「うむ、じゃあ行くぞ」

「行くぞって今すぐですか？」

「ああ、今すぐだ」

俺は今着ている格好を見る。

小汚ない着流しを着ているだけでとてもじゃないがお偉いさんに会に行ける格好ではない。

かと言って、袴なんか船には持ち込んでおらず、正装なんか持っていないかった。

「来ていく服がないんですがね？」

「そのままでもいいだろ。儀礼とか気にしない連中だしな」

「まあ、トシヤさんがそういうなら別に構いませんが……」

そして、軍議とやらにちゃっかり俺の席があったのでそこに座ると、えらく若い男、俺とだいたい同じくらいの男が話しかけてきた。

「あなたがトシヤさんとこのナオトⅡヒイラギさんですね。はじめまして」

その男はにこやかな笑顔で握手を求めてきた。
だれだかよくわからないが、とりあえず俺はその握手に答え儀礼的に微笑む。

「申し遅れました、私は艦隊参謀をしておりますクリストファーⅡ
レイブンソン。以後お見知りおきを」

クリストファーⅡレイブンソン。

どこかで聞いた名前だな、と思っていたが、その前の役職名、艦隊参謀の肩書きを思いだし、おもわず

「は？」

と、声に出し驚いた。

目の前の俺と同じくらいの年の男は艦隊参謀のクリス殿だった。
彼の発案する戦略、戦術は見事としかいいようがなく、こちらの被害は最小限、敵に最大限の被害を与える作戦をポンポン発案する様は名参謀の名を欲しいままにしていた。

俺はてっきり老獪なおじさんあたりを勝手に想像していたが、こんな優男みたいなやつだったとは恐れ入った。

「たぶん私はあなた以上に驚いていますよ。　噂の現代『剣帝』が私と同じくらいの年だったとはとね」

剣帝。

なんか俺に付けられてしまった通り名だった。

刀剣を獲物とする者の最上位として剣神、剣王、剣帝、剣聖の四つの称号がある。

その称号を持つものを破った者が次代の称号を名乗ることを許されるというルールに基づき、たまたま斬った男の中に先代『剣帝』がいたので、当代『剣帝』として今の俺がいるというわけだ。

全ては霧雨によるものだが、この称号のお陰で傭兵としての雇い口は事欠かさず、報酬も高額なので有効に使わせてもらっている。

「運が良かっただけですよ、参謀殿」

「クリスで結構ですよ、ナオト。　あなたと私は上司でも部下でもなく同志なのですから」

「同志、ですか……。　そう言われると困りますね。　俺はただの傭兵ですし、金を貰える方に着いただけですから」

「まあ、ですがあなたの活躍があつてこそその勝利もあります。　それに敵の寝返り工作に歯牙もかけなかったと伝え聞いておりますし」

「傭兵って稼業は信用第一なもんですよ。　金銭で寝返ったりしたという実績を残しちゃうと次の働き口がなくなりますんで」

「次の働き口なんか心配なくていいですよ。　あなたほどの実力者、我々がこの戦争に勝った後も引き続き雇用する形を取らせていただきたいので」

「引き続き、雇用ですか……」

「あなたほどの実力者ならば、かなり上の役職で召し抱えることも可能です。それにバーン提督もそれは了承を得ています」

こういった誘いは確かに何度もあった。
しかしいずれもその誘いを蹴っている。
理由は単純。

霧雨は安穩を許さない。

常に血を求める禍剣なのだ。

俺は戦場に身を置くことで辛うじて自我を保っているようなものである。

「せっかくの誘いはありがたいのですが、俺はこのまま傭兵として生きていくつもりです。仕官を奨めていただいたことには感謝なのですが、色々事情があるんで、この話はなかったことにしてください」

「事情ですか？ 聞いても宜しいです？」

「こいつです。参謀殿も噂くらい聞いたことありますでしょう？」

俺は参謀殿に霧雨を見せる。

「魂を糧にする禍刀、霧雨ですか。それは手放すことは出来ないのですか？」

手放す、か。

実は何度もそれは試みた。

売ったり、海に捨てたり、山に捨てたり、埋めたり。

何れをしても翌日には俺の手元に帰ってきていた。

一度抜いた以上、この禍刀は俺の魂を喰らい尽くすまで離してくれないみたいなのだ。

「独立を勝ち取った直後は確かに混乱などあるでしょう。でもいずれは収束する。収束したあと、俺はこいつを制御できる自信はありません。俺の意思とは関係なく、次はあなたがたに刃を向けることになります。それは俺の意とするところじゃありません」

仕官話を持ってきたくれた人に対して真摯に偽り無く答える。

それが俺流の礼儀だと思っている。

「ふむ、仕方ありません。できればあなたとは敵対したくないのでこの話をだしたのですが」

「それについてはご安心を。極力、縁あった場所と敵対する所に雇われるようなことはしませんので」

「それを聞いて安心しました。あなたを討ち取るためにどれだけの犠牲がでるか計算できませんので」

「さて、おそらく俺をこの場に呼んだ用件はこれだと思うのですが、これにて俺は退出しますが」

「いや、どうせなので軍議に参加してください」

「それは駄目だと思います。俺はあくまで部外者。こんな重要

で機密の塊である軍議の席に私がいるわけにも行きませんので」

俺はにこやかに笑って退室した。

第三章第3話ユハリーン王朝

軍議から帰ってきたトシヤさんに、明日の明朝、ユハリーン王都を全艦隊で包囲することが決まった、と告げられる。

「ふむ、敵の抵抗が激しいでしょうね。相手にとっては最後の戦いになるでしょうし……」

「かなりの損害が出るだろうが、籠城戦だと王都50万の民が疲弊する。ここは短期決戦でできるだけ王都の民に犠牲を出さないための作戦だ」

「俺、勝手に動いていいですか？」

「あん？」

「艦隊兵力は王都制圧後、治安維持や事後処理でかなりの人数が必要でしょうし、こんなところで疲弊させるのは得策じゃないでしょう？」

「ナオト、何を考えている？」

「俺が王都を落としますよ」

「……………出来るのか？」

「出来ないことは口にしませんよ。トシヤさんの許可さえ頂ければ今すぐにでも……」

トシヤさんはタバコに火を付け、考え込む。

「何割だ？」

「夜明けまでに王を捕らえる確率ですか？」

トシヤさんは頷く。

「敵の布陣を見る限りなら9割9分」

「そんなに高いのか？」

「10割って言い切ってしまいたいですが、万一ってこともあるんで1分下げましたが」

「その万一とは？」

「俺がこいつに喰われ尽くされる時ですよ。まあ、失敗したら本来の作戦通りをお願いします」

「喰われ尽くさなければ絶対成功する？」

「ええ」

「断言か……。わかった。報酬はだいぶ上乘せしよう」

「では、行ってきますよ。ちゃんと報酬用意しててくださいね」

そして俺は単身で王都の城門を見上げた。
当然、俺の姿は城兵に気付かれているが、たった一人で立っている俺の姿に戸惑っている様子だった。

俺は静かに霧雨を抜く。

城門は鋼鉄でできた巨大な門ではあるが、霧雨の前には紙も同然。
一閃で、城門は真っ二つになる。

「な!?!」

「なんだ、あいつは!?!」

ようやく事態を把握した城兵。

たった一閃で鉄壁の城門を真っ二つにされて自分等の防御の要があっさり抜かれたことに混乱を起こす。

俺は混乱する城兵を気にすることもなく、たった今破壊した門を潜り入城した。

「敵は一人だ!! ユハリーン騎士団の名誉にかけて討ち取れ!!」

騎士団のお偉い人っぽい男が騎士たちに向かって激を飛ばす。

騎士たちも俺が単体ということで各々獲物を持ち、俺に襲いかかってくる。

「ぐは!?!」

「ぶば!?!」

襲いかかってきた奴は全て物言わぬ肉塊になる。

その光景を目の当たりにした生き残った騎士は皆顔面蒼白だった。

「あ、あいつまさか……………、剣帝!？」

「な、なに、剣帝だと!？」

「……戦場で出会ったが最後、生き残れないという、あの!？」

「い、いやだ、俺はこんな奴に殺される最期なんて絶対嫌だ!！」

多くの騎士は騎士の誓いを忘れ、蜘蛛の子を散らすように逃げて行く。

「こら、に、逃げるな! 踏み留まれ!！」

騎士を束ねる将は慌てて逃走する部下を鎮めようとするものの目の前に俺が立ち、さらに顔を青くする。

「や、やあやあ、我こそはユハリーン騎士団第6隊隊ちよ……」

名乗りを言い終わる前に隊長の首が地面に落ちる。

「時間がないんだ、逃げるなら逃げればいい。逃げる奴までは斬らない。来る奴だけ斬る……」

「ば、馬鹿にするな!! いいか、敵はたった一人だ!! たった一人に抜かれたら末代まで汚名が残るぞ!!」

さすがに最期の砦たる王城を守る騎士団。
これだけ圧倒的な結果を見せてもまだ退かないとは。

「警告はした。それでも蛮勇な選択を選ぶか……」

行くぞ、霧雨。

お前が欲する血はまだまだ蛮勇な連中から浴びれるぞ。

ユハリーン城、王間。

王座に座るユハリーン王カムチャクは最初の報告で我が耳を疑った。

「たった一人に我が騎士団が半壊だと？」

「王よ、お逃げください!!」

「バカな、にわかに信じられん……。たった一人が、こんな」

「事実です!!」すでにそいつによって第三防衛線も破られました！
第四防衛線たる最終防衛線もまもなく決壊します。早く脱出を!!」

対海賊艦隊軍に備えさせた鉄壁の防衛陣をたった一人の侍に、さらにこんな短時間で壊滅する。

そんな話を信じろという方が無理がある。

「夢じゃ、これは夢じゃ」

「夢ではありませんよ、カムチャク陛下」

「!!!!」

そこに立っていたのは帰り血で真っ赤に染まった一人の侍が立っていた。

「ひ、ひいいいいいい!!」

「安心してください。あんたを斬るのは俺の仕事じゃない。そして邪魔をしないならわざわざ斬りはしない」

真っ赤に染まった侍はそう宣言した。

目の前に立つ侍は伝承に出てくる大悪魔に遜色ないほど不気味で、かつ恐ろしい存在だった。

自らを神の化身として自称し君臨した王が自らを小者であるかと悟らせるまでに……。

「ついて、きて、くれますね、カムチャク王？」

そのこの世のものとは思えない侍の一言でカムチャク王は腰を抜かす。

「ひ、ひいあ、あひい……」

「ちったあ、落ち着けての!! こいつを斬ったら次の血が吸えなくなるだけだろうが!!」

目の前の侍はいきなり激昂し、刀を地面に力一杯刺した。

「で、着いてきてくれるんで?」

その言葉が最期勧告に等しい響きであることを本能で理解する。
この悪魔に斬られたら魂すら消滅する。
そう感じたカムチャク王はもはや抵抗出来るはずもなかった。

第三章第3話ユハリーン王朝（後書き）

予約投稿機能使ってみる。

うまくいくのかな、（ドキドキ

第三章第4話 カルザールへ

「剣帝の通り名は伊達ではないと言うことですか」

祝勝会で一人酒を飲んでいるとそう声をかけてきたのは参謀殿のクリスだった。

「ああ、参謀殿。 傭兵である俺まで祝勝会に呼んでいただき有り難うございます」

「何を謙遜を。 最後のユハリーン城攻略なんて文字通りあなた一人で成し遂げたようなものでしょう」

「これから建国する以上、兵力を無駄に減らすわけにはいかんでしょう。 ですので僭越ながらでしゃばらせていただいたわけです。 当然、報酬の上乗せは大いに期待していますが」

「報酬は望み通りに支払いましょう。 で、ナオト。 あなたはこれからどうするのです？」

「これから、ですか。 まだ正式に決まっていますが西の大陸で色々戦火が燦っていると聞きましたし、戦場を求めて西の大陸に渡るんじゃないですかね」

「西、ですか。 あっちの方で戦乱が起これと言えば、ナストリーニやウエンドスっていったところですか」

「そこなら傭兵の口があるだろうと踏んでいますしね」

「西も戦乱の火種がありますが東もキナ臭い空気が流れていますよ」

「東って一番の戦火はつい最近までここでしたでしょう。このユハリーンを除けばほとんどヴィンセント帝国の支配下にある西のどこに戦火があるの？」

ユハリーンという国以外、東大陸のほとんど支配下に置いているヴィンセント帝国。この国をとるため、今動き出すという愚は起こさないだろう。

西大陸の情勢が不安定である今、勢いに乗っている東方の国ユハリーン王国と戦端を開くと東西に戦線が広がり、ヴィンセント帝国得意の物量戦の効果が半減するからだ。

「ありますね」

参謀殿は確信をもって断言した。

「ヴィンセント帝国の藩属国であるオオエド、カルザール、マウンテーンヤなんですけど近いうちに独立します」

「なんでまた？ 支配国とはいええ自治を認められている国だろ」

「自治を認められていた、というのが正しい認識です。今の皇帝デュライが帝位に就くための帝位継承戦争でその三か国は現皇帝を支持せず幼帝に支持したということはご存じありませんでしたか？」

「ああ、なるほど」

帝位継承戦争。

ヴィンセント帝国の現代皇帝の座を巡り、先帝の長男であり皇太

子のデュライと、先帝の最も寵愛を受けた側室が生んだ次男クローセムが帝位を巡ってヴィンセント中が戦火に巻き込まれた戦争である。

余談だが俺もクローセム側について参戦した経緯があるためになり内情は詳しく知っているつもりだったが。

「そうか、デュライは敵対したものは許さないということか」

「ええ。その三国は風前の灯ですね。やられる前に必ず独立するでしょう」

「だが傭兵として勝ち目の無い国に雇われる気はないけどね」

敗戦が確定している国に雇われるとか自殺行為。

一応俺は傭兵団の頭目である。

自分だけではなく、部下の命にも関わる以上、雇い主は厳選なる眼で見極めなければならなかった。

「それに、あなたにとって他人事ではないではないでしょうか」

「オオエドのこと？」

オオエド。

確かに出身国ではあるが、あの国にいた知人はほとんどが死んだか大陸中に散っており、そこまで感慨深く考える国ではなかった。

いや、俺の父や義父を直接殺した連中が政権を握る国。

俺にとって恨みはあれど助ける義理すらない。

参謀殿は俺が倭人だからそんなことをいったのだろうと、軽く苦笑した。

「いえ、カルザールですよ」

キョトンとした顔を俺はしているだろう。

まだマウンテータには知古の人間はいるがカルザールに知り合いなどいないはずだ。

「あれ、知らない……みたいですわね？」

「なんのことだ？」

「カルザールにはあなたの妹がいること、ご存じない？」

「な、なんだと!？」

「カエデ!! オオクボ。確かあなたの妹だったと記憶してますが」

な、なんでこの参謀殿は俺が探してもみつらなかつた妹の消息をしってやがるんだ？

そうか……。

カエデはカルザールにいたのか。

カエデと別れたのは10年前だから、あの時7歳だったただったカエデは今、17歳か。

義母の血を引いてるんだから、さぞ美しく成長しているんだろうな。

………じゃなくて、参謀殿は何て言っていたかよく思い出せ。俺にとって他人事ではない、ってことは……。

「まさかカエデのやつ、カルザール王国に仕官しているのか？」

参謀殿は頷いた。

「……私は他国の軍事力などを知っておかなければ話にならない役職ですしね。他国の主要な武将や文官の知識くらいは知っていないとこんな仕事出来はしませんよ」

調べてみたらあなたの妹だったってだけで、知り得たのは偶然だったんですがね、と参謀殿は付け加えた。

「なるほど。俺の次に向かう国は決まりましたよ、参謀殿のお陰でね」

「思わぬ塩を送ってしまった形になりましたが、まあ、あの国は我が国と事を構えることは皆無でしょうし、餞別と言えは餞別ですね」

「何にも代えられない餞別、有り難く頂きました。この恩、いずれ返しましょう」

「サムライとの約束は信用できますね。……是非期待しましょうか」
参謀殿はにこやかに笑ってそう言った。

さて、カルザールに着くにあたりやらなければならないことがある。

「今回はお前らのおかげで雇用主を勝利に導くことが出来た。おかげで報酬はかなりの金額をもらえた。これも単にお前らのおか

げだ」

俺は自分が率いる同胞を集めた傭兵団に今回の戦の謝意を述べた。

「で、このままユハリーン海賊艦隊、もとい新生ユハリーン王国は建国にあたり今回の功績を重く見てくれて、そのまま雇用してもいいと仰せだ」

おお、と傭兵団から歓喜の声が上がる。

「俺は仕官を蹴ったが、残りたいやつは残ってくれ。参謀殿に話は通しておく」

「ちょっとまってください」

傭兵団の男が声をかけてくる。

「頭領は仕官話を蹴ったってどういうことで？」

「当然の疑問だな。俺は明日にでもカルザールに行こうと思う」

「カルザール？ また戦ですかい？？」

「ああ、ただ今回は一緒に来ることはお薦めしない。今回の敵はヴィンセント帝国になるだろうからな」

俺のこの言葉に一同はドヨつく。

「頭領が見るに勝算はあるんで？」

「3、といったところだ。状況次第では2まで落ちるかもしれないが」

「0じゃないんで？」

「ああ。ただし、雇ってもらえるかどうかはまだ交渉すらしていないし、場合によっては戦う以前に雇ってもらえない可能性もあるがな」

「ふむ。頭領はなぜそこまでカルザールに固執するんで？」

「妹がカルザールにいた」

「ああ、十年前離れ離れになったというあの？」

俺は静かに頷いた。

一同はざわつく。

結局、残ったもの、俺についてくるもの半々に別れた。
俺は着いてきてくれるという奴らに問いかける。

「負け戦濃厚だぞ？」

「俺らが行かなきゃ負け戦なんですよ？」

「……報酬も充分払えないのかも知れないんだぞ？」

「ある程度見切りはつけますさ。なにより頭領……、俺はあんたと共に一緒に戦いだけですさ」

「そうだな。

俺は誇るよ。

俺にすぎた戦友^{とも}を得たことを」

第三章第4話 カルザールへ（後書き）

修正歴

2011年5月5日……タイトル2話を4話に修正

第三章第5話 カルザール道中

カルザール王国。

立地的には四方を山に囲まれ、高度も高い位置にある国だった。俺はその国に傭兵として雇ってもらうために山を登っているとこ
ろだったのだが……。

「貴様ら、何者だ!!」

運悪く、ヴィンセント兵に見つかってしまった。

敵の数はざっと30程度。

こっちは俺含めて20。

数の上では向こうが有利ではある。

「貿易商です。 カルザールに香辛料を売りにいくところでして」

俺はヴィンセント兵の頭と思われる男に近づき、金子の入った袋
をその兵の手に握らせる。

「……………俺を買収する気か、お前？」

そういつて兵頭は睨みながらドスのきいた声でそう言い放つ。

（ちっ……、こいつ金では転ばないのか）

「いえいえ、お近づきの印で御座います。 通行料も含んでいます
が」

兵頭は部下たちを見て、

「やけにものものしい男たちだな。 あいつらは？」

「へえ……、この近隣は野盗が多いため、護衛として引き連れてお
りまして」

「ふむ。 ……ところでお前、どこかで見たことあるんだよな」

「へ？ 私はただの貿易商ですよ。 ひょっとしてどこかの町で私
どもの香辛料お買いになれたことがあるんですか？」

「いや、町ではない。 戦場で、お前を見たことがある」

「せ、戦場？ 私は一度も戦場になんかいったことないですって」

俺は慌てて否定するも、心ではもう覚悟を決め、部下たちに目合
わせをして合図を送った。

俺が昔駆け抜けた戦場でこいつは俺を見たんだろう。

霧雨という禍剣を持った傭兵を。

顔は笑顔を崩さず、俺は殺気を必死に潜めながら、ギリギリの交
渉を続ける。

「そろそろ、いいだろう。 お前は何者だ？」

兵頭が腰の剣を抜いた。

もはや、とぼけても意味がない。

「ですから、ただの貿易商ですよ」

そう言い終わると同時に目の前の兵頭は血飛沫を上げ、たおれこ

んだ。

「!！」

「お前!！」

一瞬、何が起こったかわからなかった兵頭の部下たちが色めき出す。

「迂闊なんだよ、お前ら。 数で慢心したか？」

俺の部下たちも次々抜刀する。

この世界には様々な兵種が存在する。

その中で侍という兵種はこと白兵戦においては最大の攻撃力をもつ。

それを立証したのはほかでもないヴィンセント帝国である。

今でこそ、侍を多く抱えるオオエドはヴィンセント帝国に臣従しているが、その歴史に至るまで、ヴィンセント帝国と侍は幾多の戦争を経ている。

その戦い戦いの中で侍はヴィンセント帝国が抱える幾多の兵種を白兵戦で圧倒した歴がある。

これまで白兵戦最強と言われた竜兵ですら、侍に白兵戦で敗走を繰り返したのである。

侍が持つ刀。

鉈のように頑丈で剃刀の用に斬れるこの武器が侍を白兵戦最強と軍学の常識になったのだった。

「俺らを白兵戦で潰したければ10倍の兵を持ってこい」

勝負は一瞬で決した。

第三章第6話 カルザール王国

カルザール城、王の間。

王座に座るのはまだ即位して半年にも満たない、まだ若すぎる王女が座っていた。

女王の年はまだ15になったばかりにも関わらず、このカルザール史上最も最悪な国難に直面していた。

「ランスロット、どうでしたか？」

女王エリザは、ヴィンセント帝国に敵対の意思はなく、これまで通り従属する意向を使者を使って声明したのだが、

「申し訳御座いません。デュライ帝を説得すること叶いませんでした」

「……そうですか」

想像していたとはいえ、交渉の余地はないという現実を叩きつけられ、エリザは消沈した。

「デュライ帝は我が国に対し、即時政権解体を要求しております。そして女王の身柄を帝都に移送するようにとのことです」

「即時、政権解体、ですか……。 お父様、いえ、先王が命を賭した謝意もデュライ帝には通用しなかったということですね」

前王、エリザの父は先の帝位継承戦争でクローセム派を支持する声明を出した責任をとるため、エリザの兄である皇太子と共に帝都

で自害した。

それでも現皇帝の怒りは溶けず、今の局面を迎えていた。

「女王、400年続くカルザール王家をただ言われるまま終焉させるのはご先祖様たちに申し訳がたちません。ここは戦うべきです！」

カルザール軍総督を任されているメルティナ將軍は玉碎覚悟での開戦を主張した。

「戦うといっても、我々の保有兵力は帝国に圧倒的に足りていないですよ。無駄に兵の血を流すのですか？」

「そうですね。それに戦になると民にも負担がかかります。ここは屈辱ですが帝国の意のまま降伏したほうが……」

それに対し、文官たちは降伏論を唱える。
メルティナはそんな文官たちを睨み付け

「降伏だと？ 貴公らは降伏することで女王がどうなるか想像もできんのか！」

「しかしですよ、將軍。勝ち目の無い戦いに兵や民を巻き込むことは、後世にカルザール王室、ひいてはエリザ女王の悪名が刻まれます。暴戦に挑んだ愚女王として。名を取るならばここは降伏の英断こそが正しき道かと思われます」

「それが、本当に王室への忠義から出た言葉なら私も耳を貸そう。しかし貴公らは自分の保身を第一に考えた発言。貴公らの主張はエリザ女王、ひいてはカルザール王室への反意に他ならない！！」

「無礼な！！　メルティナ將軍、それは我々への侮辱な発言ですぞ！！　　いますぐ撤回を！！」

「黙れ、腰抜けども！！　事実をそのまま私は述べたにすぎない！！」

抗戦論を唱えるメルティナ將軍と、無血開城を唱える文官の意見は平行線となった。

エリザはその様子を悲しそうな顔で見つめていた。

（どうしてこうなったの……？）

前王であった父と、兄だった皇太子が自害し、急遽女王として即位したエリザは、王としての教育は受けていない。

家臣たちを宥める術も持ち合わせていない。

エリザは自分の無力さに下唇を噛みながら、悔しんだ。

「控えろ、諸兄」

平行線な言い争いをしているメルティナと文官たちに言い放ったのは、宰相の位置にあるランスロットだった。

「諸兄らの意見はわかった。決断は近日中、評議で女王自ら下す。おのおの、その採決を待て。それでは本日の評議は閉会とする」

ランスロットはそう言い放つと、エリザに向かって微笑む。

「女王、お疲れさまでした。ひとまずゆっくりと今後を協議しましょう」

「……ごめんなさい、ランスロット」

「いえ、気にならずに。とりあえず、部屋に行きましょう」

エリザの部屋。

その場には、エリザとランスロット、そして倭人の少女の三人がいた。

「エリザ様、お疲れさまです」

倭人の少女は、エリザの好きな葉でお茶を煎れる。

「ありがとう、カエデ」

「宰相様は、熱々の渋目がお好みでしたね。少々時間かかりますのでそこはご容赦を」

カエデはクスリと微笑みながら、お茶を準備していた。

「すまん、カエデ。かなり渋く煎れてくれ」

「畏まりました」

「ところでカエデ……」

「はい、なんでしょう?」

「あなたは抗戦がいいと思う? それとも降伏したほうがいいと思

う？」

エリザは弱々しく、カエデに意見を求める。

「……私個人の意見を言わせていただければ、抗戦ですね」

「なんで？」

「私は女王様が姫様だった時から護衛として近習していたんですよ。降伏なんてことになったら姫様とお別れになりますからね。そんなのは嫌です」

「私だって、ランスロットやカエデと別れるのは嫌です。でも、降伏すれば兵や民はむだな血を流さなくて済みます。それに、文官たちが言うように勝ち目なんてありませんし」

「……勝ち目がなければ勝ち目を作ればいいだけです」

エリザとカエデの会話に知らない男の声が挟んできた。
二人が声のする方を見ると、一人の侍が立っている。

「何者です!？」

カエデはナギナタを構えて侍を見つめる。

「え……?」

「大きく、そして美しくなったな、カエデ」

「う、うそ……」

カエデは信じられないものを見た顔をする。

「お兄……様……」

「やっと、見つけた。 ……やっと」

ナオトは優しく微笑みながらそう呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3524r/>

提督立志伝番外三章～霧雨編～

2011年5月7日05時23分発行